【シンポジウム記録】

（2007年度 スポーツ政策シンポジウム　2007年10月14日（日）開催）

「スポーツの教育力
—地域再生のハブとして—」

横山　勝彦・真山　達志

〈横山〉ただいまより同志社大学大学院総合政策科学研究科2007年度総合スポーツ政策シンポジウム「スポーツの教育力——地域再生へのハブとして——」を開催いたします。私は、本日のコーディネーターを務めます同志社大学の横山勝彦と申します。よろしくお願いいたします。では、はじめに新川達郎研究科長よりご挨拶を申し上げます。

〈新川〉皆さん、こんにちは。今日は日曜日の午後にもかかわりませず、多数ご参加をいただきまして本当にありがとうございます。このスポーツシンポジウムは毎年開いて、ずいぶんと会を重ねてまいりました。今年は「スポーツの教育力——地域再生のハブとして——」という表題で開催させていただきます。今年度は特に同志社大学大学院総合政策科学研究科と朝日新聞社、京都市朝日会との共催で催しをさせていただくことになりました。改めまして感謝申し上げたいと思います。またあわせて日本体育・スポーツ政策学会のご後援もいただき、幅広く各層の方にお出でいただけるということで感謝申し上げたいと思っております。

さて、スポーツ政策という観点で何年かこうした催しを重ねておりますが、毎年やるたびに、今、社会の中でどういう問題が起こっているのか、それに対してスポーツがどんな意味を持っているのかを、改めて強く、深く感じさせられることが多うございます。実際、日々のいろんな問題を新聞報道その他、ごく身近に見聞きするに際しましても、今、経済問題であれ、人間関係の問題であれ、家族の中のことであれ、本当に悲しい問題、大変なことが次々に起こっているところがございます。もちろん、それらすべてがこれからの社会問題として、一つひとつ丁寧に解きほぐしていかなければならない重要な課題であることは言うまでもないことであります。しかしその時に、それらの社会問題の背景にあるものというのを改めて強く感じざるをえません。それは詰まるところ、人の問題、人と人とのかかわりの問題というところに行き着くような気がしています。一人ひとりの人、そこに暮らす一人ひとりが本当にその人としての生き方、他の人とのかかわり方ということについて真剣に考え、真剣に生きようとしているのかどうか、そういう力を一人ひとりが身につけているのか、そういう問題にいつも突き当たらざるをえない、そんな場面がたくさんあって、気になって仕方がないというのが、私自身のこのところの実感でもございます。

今回、スポーツがそうした人の成長、人の学びということについてどういう力を発揮できるのかを改めて考えてみたいということで、横山先生はじめ、多くのゲストの方々においでいただき、お話いただくことになりました。もちろんスポーツが万能薬のように人の学び、教育の力を発揮できるかどうか、これは何にでも通用するというふうにはなかなか言えないだろうとは思っております。しかしもう一方ではスポーツが持っている力、これは社会のいろんな面ですでに証明されているところでもあります。いわば人が学びということを考えていく時、スポーツほどそれを客観的に具体的に実感できる学びの場はないんじゃないかと思っているところです。スポーツの教育力というのはそれぞれのスポーツを通じて一人ひとりが自らの目標を自分自身のために達成していく、そのプロセスを大事にしながらやっていく、そういうところにスポーツのすばらしさもありますし、またス

ポーツの持っている教育力もあるのだろうと思います。どんなスポーツ競技も、団体競技であれ、個人競技であれ、そこには常に自らの力、自らの能力、技術をどこまで高めていくかに大きなウェイトがかかっているのだろうと思います。そうした力をつけていくことの中に人として何を学んでいかなければならないかということと、同じエッセンスが詰まっているのではないかと感じているところであります。

今日はそうしたスポーツの分野の先達たち、同志社が誇ります優れた先輩方においでをいただき、そうしたスポーツの教育力、学びの力のエッセンスをお話いただけるということで大変楽しみにしております。またあわせて、本学の教員からも教育という問題についてどういうふうに考えていったらいいのか付け加えをさせていただくことで、本日のシンポジウムの広がりと深みを広げてまいりたいと考えております。今日は多くの方においでをいただきまして改めてお礼を申し上げますとともに、まずはご挨拶に代えさせていただきたいと思います。本日はゲストの皆様方を含めまして本当にありがとうございます。よろしくお願いをいたします。

〈横山〉それでは私の方からシンポジウムの趣旨と講師の先生方のご紹介をさせていただきます。学生さんからご年配の方までたくさんお集まりいただきました。スポーツとは一体なんでしょうかと問われた時、こうして改めて聞かれるとすぐには返答に困ってしまいますよね。それだけ我々の日常にすっかりスポーツが根づいていまして、空気のようにあたりまえのようにあるというわけです。スポーツはプロの片岡さんのように、それで生活をするものとか、お金になる、ならないとか、するものだ、見るものだ、支えるものだ、一生の糧にするものだと、いろんな答えが返ってくるかと思います。思い切ってまとめますと、二つの方向になるのではないでしょうか。一つはお金になる、キャッシュを生む。もう一つはそうではなく、直接的には生活に貢献できるものではない、お金を生まないもの。会社で言いますと広告宣伝のマターと地域貢献のマターだと思います。企業もイメージをよくするためにスポーツクラブをつくり、それによってスポーツに金がかりますから費用対効果で考えますと、それほどお金をかけてもすぐにはお金にならないから企業のスポーツクラブを廃部しますとか、スポーツイベントに派手な演出をして一生懸命盛りあげて放映権料を上げましょうという方向と、新川先生がお話されたように、しっかり自分の心と身体を鍛えて自分ができないことができるようになる、そういうことを人につなげていく、人と人が安定した人間関係をつなぐ。こういう二つの部分があるかと思います。

スポーツの問題は、今例えば、野球の特待生の問題が、この間の有識者会議で見解が出ましたが、この二つの方向が入り交じっています。そういうところが今の現実にあるのではないか。地域の方もそうです。商店街にシャッターがおりて地域が活性化しない。NPOもたくさんできていますが、その取り組みを見ましても経済波及効果が念頭にありまして、いろんな取り組みがなされていますが、拠点というか、皆がよってくる場所がない。スポーツ祭にしても一過的なイベントになりまして、その時は盛り上がるのですが、なかなか伝わるものがない。しかし、すぐには効果も見えにくいですし、お金にもなりにくいのですが、スポーツが持っている心の部分、情的な部分、教育力という情的な部分が皆さんを引きつける拠点になれるのではないか。その可能性を探ろうというのが、このシンホジウムの狙いでございます。

先生方をご紹介いたします。大谷實先生です。先生は刑事法学がご専門です。司法試験委員など重職も歴任され、犯罪の被害者救済という社会啓発にも力を注がれております。現在、同志社幼稚園から大学院まで、人間の基盤をつくる部分を統括される同志社総長のお立場から「“教育”を考える――教え、教えられ、育み、育まれ――」というテーマでご講演いただく予定です。お聞きするところによると若い時代、ボクシングに相当熱を入れられたと聞いております。お話に出るかどうかはわかりませんが、そういうエピソードもお持ちでございます。

続きまして真山達志先生です。先生は行政学、地方自治論がご専門でございます。自治体の職員の政策形成などの研究会、評価委員会委員として地方自治体では今、引っ張りだこの先生であります。スポーツとのかかわりは同志社大学テニス部の部長をされています。ご本人はあまりスポーツをされないということですが、スポーツ関係のシンポジウムに半ば私から強引

に、半ば先生から自主的に参加されておりまして、スポーツも最近のご専門の一つかと理解しております。そういう立場から先生には「地域社会形成に期待されるスポーツの機能」というテーマでご講演をいただきたいと思います。

続きまして片岡篤史さんです。これからのお３人は改めてご紹介するまでもないんですが、片岡さんはPL学院、同志社大学ご出身のエリートコースを歩まれまして、日本ハムに在籍後、2005年、阪神タイガースに入団されました。ここぞという時の切り札として活躍されたということです。皆さんに惜しまれながら、2006年に現役引退されたということでございます。ベストナイン賞、ゴールデンクラブ賞等多くのタイトルを獲得されて今は解説者としてご活躍でございます。片岡さんには野球から学んだことを次の世代に伝えたいということで「フェアプレイ」についてお話していただきたいと思っております。

続きまして奥野史子さんです。奥野さんも同志社ご出身で総合政策科学研究科修士課程で勉強されまして修士をとっておられます。シンクロナイドズドスイミングで92年、バルセロナオリンピックの銅メダリストでいらっしゃいます。テレビとラジオ、イベント出演、京都府委員としてまちづくり、子育て、人づくりなどにも意見を述べておられます。世界陸上でご活躍されました朝原選手との間にお二人のお子さんがおられまして、トップアスリート二人の子どもはどんなになるんだろうと今から楽しみであります。奥野さんを見ていますと、大変、己に勝つ気持ちが強いということで「克己心」、スポーツにつきものですので、そういうことについてお話をしていただきます。

続きまして大八木淳史さんです。大八木さんも名門伏見工業、同志社大学ご出身で学部よりもラグビー部ご出身という印象が強いかと思いますが、元ラグビー日本代表などで紹介するまでもない大選手でありました。現在はラグビーの育成、普及ということで全国各地、講演に回られまして、昨日はどこか、今日もこれから東京とか、目まぐるしくご活躍でいらっしゃいます。高知の高校でGMとして活躍されて青少年育成を目指されています。現在、大学院のドクターコースに来られていまして、スポーツ政策の研究をされています。テーマが「スポーツによる青少年育成」ということで、今日はドクター生らしいアカデミックなお話になるかと思います。大八木さんからはラグビー精神の現れであります、「ノーサイド」という精神についてお話いただくということでございます。

大谷先生、真山先生の基調講演の後、３人の方からキーノートレクチャーをいただきます。それでは最後までよろしくお願いいたします。それでは大谷先生、よろしくお願いいたします。

“教育”を考える
――教え、教えられ、育み、育まれ――

大谷　實（学校法人同志社総長）

ただいまご紹介いただきました同志社総長の大谷でございます。本日は同志社大学大学院総合政策科学研究科、朝日新聞社、京都朝日会の共催のもとにこのようなシンポジウムが、この同志社で開催されましたこと、誠にうれしく存ずる次第でございます。

さて本日の主題はスポーツの教育力、教育効果について、でございます。ここで問題となります教育力とは一体何なんだろうかということを考えてみますと、なかなかいろいろ難しいところがございますが、私は結局、教育力というのは、教え、育てる、本日の課題で言いますと、青少年の健全育成、健全な人格の形成への影響力であると一応整理しておいた方がよいかと思っております。

教育力を支えておりますのは言うまでもなく家族、学校、あるいは近隣社会、その他諸々の人間関係でございますけれども、しかし現在は家庭や学校、地域社会が十分な教育力を発揮できない状況にあると言われているわけであります。

私の専門の犯罪学について申しますと、日本の治安は戦後の混乱期から1960年代にかけて非常に悪かったのでありますが、1960年代後半から70年代に入りますと世界で最も安全な国と言われてきましたことは皆さん、ご案内の通りでございます。1998年（平成元年）の犯罪白書はその安全の理由として「遵法精神に富む国民性、経済的な発展、低失業率、特に教育の高水準、地域社会の非公式な統制の存在」というものを挙げている次第でございます。ところが10年前くらいから犯罪が次第に増え始めまして、ここ

数年間は犯罪の認知件数、警察が把握した犯罪の件数ですが、これが180～200万件を推移しておりまして、1965年頃の1.5倍というありさまでございます。特に注目されますのは殺人や傷害、特に強姦という凶悪犯罪が増えていることでございます。また少年犯罪の低年齢化がどんどん進んでおりまして、13歳以下の触法少年の凶悪犯が目立ってきているところでございます。

おそらく皆さんも犯罪が増えていて、怖い社会になっているという不安を感じておられると思いますが、国民が感じます治安の水準、これを体感治安と言っていますが、体感治安が非常に悪くなっておりまして、安全で安心なまちづくりが国や社会の大きな関心事となっているのが現状であるかと思います。そこで政府は2003年に犯罪対策閣僚会議を設置いたしまして、犯罪に強い社会の実現のための行動計画を発表いたしました。その重点課題の一つといたしまして、殺人や強姦と言った凶悪重大犯罪に対する刑罰を重くする、いわゆる重罰化のための法改正を３年前に実施したのでございます。たとえばこれまで有期懲役で一番重いのは15年でございましたが、これを20年に引き上げるという政策でございます。こうした法改正などの影響によりまして裁判所が言い渡します刑罰もだんだん重くなってまいりました。死刑判決も1990年頃は１年に０件か１件でございましたが、ただいまは毎年、十数件ありまして、その数もその後、２桁を続けております。また少年に対しましても少年院に送るという保護処分よりも少年刑務所に入れる厳しい選択がなされるようになってまいりました。

こうした取り組みが効を奏したためか、昨年頃から犯罪が少し減り始めたのでありますが、しかし1990年代の水準までに戻すことは容易ではないと思います。確かに刑罰を重くすることによって犯罪防止をすることはある程度はできるのでありますが、しかし犯罪をしてはいけないという国民一人ひとりの意識、これを広い意味での規範意識と言いますが、規範意識を強めることは重い刑罰を科すだけでは不十分であります。一番大切なのは、そういう意識の基礎となっております人格の形成、道徳心の養成にあることは疑いないところでございます。もう一つ大切なのはそうしたものを支える良好な人間関係、信頼関係に基づきました地域の連帯でございます。しかし人格形成で最も大切な家庭の現状を見ますと、子どもへの無関心、過保護、さらには子どもに対する期待過剰という親の保護的な、教育的な役割、機能が非常に低下しているという家庭が目立っておりまして、それが犯罪や非行につながっていることは今は常識となっているところでございます。さらに学校生活でも規範意識や人格形成についての教育は極めて不十分でありまして、学習指導要領でいわゆる道徳教育の必要性が常に問題にされている所以でございます。

一方、良好な人間関係や信頼関係を築くこと、地域連帯の再生、これもなかなか難しいようでございます。特に人口が集中し、社会が都市化してまいりますと、一人ひとりの個人が孤立してまいりまして、家族同士のつきあいもだんだんと疎遠になって連帯意識が薄くなってまいります。近所の人の名前を互いに知らないということも少なくありません。そうした環境では他人の子どもを叱るということがなくなってしまいまして、地域の教育的機能は低下するばかりでございます。要するに犯罪をしてはいけないという規範意識の基礎となっております人格の形成は現在の家庭や学校、地域を基礎としたものでは不十分であるという結論が得られると思うのであります。

これまで犯罪の防止の観点から教育力の問題を見てまいりましたが、このことはひとり犯罪の問題だけではありません。一般の少年や政治についてもあてはまると思うのでございます。そこで登場しますのがスポーツの教育力ではなかろうかと思っております。本日は総合政策科学研究科の主催ですので、そもそも国はスポーツ政策をどのように考えているか。1998年、スポーツ振興法１条では「この法律は国民の健全な発達と明るく豊かな国民生活の形成に寄与することを目的とする」とうたっております。また２条では「スポーツとは運動機能及び身体活動であって、心身の健全な発達を図るためになされることを言う」。このように定義しております。国はまさにスポーツを心身の健全な発達、つまり教育の一環としてとらえているわけであります。この法律に基づきまして文部科学省は2000年９月に2001年度から2010年度にわたって実施される予定のスポーツ振興基本計画をつく

りました。計画の概要は、一つはスポーツ振興を通じた子どもの体力の向上。子どもを引きつけるスポーツ環境の整備や教員の指導力の向上などが盛り込まれています。二つ目は地域におけるスポーツ振興の整備充実でございます。総合型地域スポーツクラブの全国的で展開、さらには生涯スポーツ社会への実現のために成人の週１回以上のスポーツ実施率が50％になることを目指す方策もうたわれているところでございます。３つ目は我が国の国際競争力の総合的な向上を図る政策でございまして、ジュニア級からトップレベルに至るまで一貫した理念に基づく最適な指導を行う。一貫指導システムの構築ということがうたわれております。

スポーツ振興法は、国がスポーツを教育の一環としてとらえ、スポーツ社会の実現に向けて10年にわたる基本計画をつくりまして、その実施を推進しているところでございます。それではスポーツの教育力というのは具体的にどのような形で発揮できるのかということが次の問題でございます。明治５年（1872年）日本で最初の学校教育制度ができました。学制が敷かれたわけですが、この時、学校に初めて体操が教科に導入され，我が国で初めてスポーツの問題が取り上げられたわけです。スポーツについての教育力を重視した人物は他でもございません、同志社の創設者であります新島襄でございまして、彼は1870年代に知育・徳育及び体育を三位一体とした教育を重視したことで知られているのでございます。新島はスポーツによる個人の人格形成を基礎としながら自治・自立の精神に立って道徳心を養い、品性を高め、良心を手腕に運用して自らの運命を切り開く、一人ひとりの独自性を発揮して社会の発展に貢献できる人物の養成を、これを教育の理想としたのでございます。これがまさに同志社ブランドとしての良心教育でございます。

この教育理念に立ちました同志社スポーツの関係者はトリプルFをもって同志社スポーツの教育力と考えたのでございます。一つはフェアプレイ、公正でございます。もう一つはファイティングスピリッツ、闘争心です。３つ目はフレンドシップ、友情、友愛。この３つの言葉をとりまして３つのFとしたのでございますが、同志社スポーツはこれら３つのFを心構えとして行わなければならない。同時にトリプルFは同志社の教育力となって良心を手腕に運用する人物の養成に結びつくと考えてきたのでございます。

私は教育の目的は、教育基本法がいいます人格の完成、自己実現が究極の目的であると考えております。私たちの人生航路はこの目標に向かって、人格完成という目標に向かって自らの生き方を決め、自己決定し、家族や友人、さらには社会の助けを借りながら人格の形成に向かって邁進する時に本当の幸せが得られるのだというのが私の教育に対する基本的な、人間の生き方の基本的な考え方でございます。

ここで大切なことは人間の生き方として目的を持つこと、どのような人生航路を歩むかという目的を持つこと、自立してこれを実現していこうとすること、つまり自治・自立の精神、さらには自らをコントロールする力、そして何よりも人や社会の連帯、人と人との関係性ということを大事にすることであろうと思っています。スポーツの神髄は自ら目標を立て、監督や指導者の指導を受けて目標達成のために全力を傾けて練習し、闘争心を持って競技にあたることであると私は思っております。

このように見てまいりますと、スポーツの教育力、教育効果というのはまさに教育の本質、本来の姿と重なりあうものではないかと思うのであります。ある意味でスポーツの教育力は現代社会の欠陥を埋めるものとして、これから本格的に論議されるべきでありまして、本日のシンポジウムが、この点についての実り豊かな成果が得られますことを心より期待し、またお祈りをいたしまして、私の基調講演を終わらせていただきます。誠にありがとうございました。

〈横山〉どうもありがとうございました。同じ大学にいながら大谷先生のお話を伺うのは久しぶりでございまして大変感激をいたしました。スポーツの教育力は教育の原点という心強いお言葉をいただきました。ありがとうございました。

続きまして真山先生、よろしくお願いいたします。

地域社会形成に期待されるスポーツの機能

真山達志
（同志社大学大学院総合政策科学研究科教授）

ご紹介いただきました真山と申します。今、大谷総長の格調高い講演の後ですが、大谷先生のこういう講演をお聞きするのはあまりなくて、入学式、卒業式の祝辞の時だけなんですが、今のお話を聴いていますと、スポーツのところをとりますと、卒業生に送る祝辞のようにも聴こえまして、ということは、スポーツは人生を生きていく上で非常に重要なものだなと、そのことを端的にまとめていただいたのかなと思います。

教育との関係で文部科学省のスポーツ政策のお話も出ておりました。私のテーマは「地域社会形成に期待されるスポーツの機能」ということでお話をすることになっております。国の政策というようなことも若干、関係はしますが、地域、地域社会とのかかわりでスポーツを見てみたいと思います。

大谷先生のお話の中にもありましたが、最近、よく地域社会での人間関係が希薄になっているとか、地域社会が崩壊していると言われています。感覚的にそういうことが言われていると思います。ただデータ的にはあまり実証できない部分もありまして、たとえば地域社会の一番基本になる自治会、町内会に注目してみますと、５年ほど前、京都府の研究会で私もかかわって調査をしました。京都市を除く京都府内全域で調べてみますと自治会、町内会の組織率、加入している人の割合が100％というところが、実は非常に多い。内閣府が毎年、国民生活行動調査をやっていまして、このデータの中でも結構、地域の組織、自治会などに加入している人は多いんです。組織がどんどん弱体化しているということは数字では出てこないんですが、ただもう一方で調査の内容をよく見てみますと、実際に活動に参加しているかとなると、ぐっと数が減ります。「自治会の活動に参加しない」と答えた人は全国で51％を超えております。51.35％。つまり半数以上の人はほとんど参加していない。名前だけは加盟しているが、実際、活動していない、参加しないとういうことがあります。

最近、よく注目されるNPOやボランティア活動があります。これはどうか。同じ調査の中で見てみますと実ば83.9％の人が「参加していない」と答えています。注目されているわりには実際参加している人は、わりと限られているというのが現状だろうと思います。地域社会での人間関係が希薄になっているという感覚的な部分は、あながち外れていない、当たっているのかなという気がします。なぜ地域の人間関係、地域の活動に対してのかかわりが減っているのか。この理由は今更言うまでもないと思いますが、昔ですと地域の中で生きていくためには互いに人間関係をちゃんと維持しておかないと生活自体が成り立たないという、まさに相互に協力しながら生活していた時代があったわけですが、現代社会では、別に近所に依存しなくても通常は生きていける。むしろ隣近所とのつきあいは煩わしいもの、余計なものという感覚があります。実態としてそうなっているかと思います。そして職場、家族という地域の人間関係以外の関係の方がずっと気楽で楽しいということがあるかと思います。人間関係の中心は地域の組織や活動から職場、家族、友人という別の組織、関係にどんどん移行してきた結果なのだろうと思います。

では地域というものが必要ないのか。しかし実際にはそうではないということです。このことが典型的に現れましたのが、1995年に起こりました阪神・淡路大震災の時です。あのような大きな災害が発生しますと地域の相互の救助活動、支えあいが人間が生きていく上でいかに必要かということをまざまざと見せつけられるわけですが、それ以降、地域の重要性というものが再認識されたと言ってもいいと思います。総長のお話にもありましたが、地域の教育力というのもそうですが、防災という側面、災害が起こった時の助け合いということは、まさに命にかかわる問題として重視されるようになりました。こういう地域の人間関係の重要性については、いろんな研究の分野でも注目されていまして、研究者ではソーシャル・キャピタルという言葉を使う場合もあります。社会的共通資本とか、地域の人々の人間関係や信頼関係がきちっと確立されていますことは、人が生きていく上でも、民主主義というのが健全に発展、機能していく上でも重要だということが言われています。そういう言葉を使いながら論じるわけですが、一般の人でもそういうことは常識的に、感覚的にわかっていることだと思います。

人間関係なしに人間が生きていけるとは誰も思っていないわけですし、いざとなったら支え

あいということで、近所に住む人々の力は大切だということは重々承知しているだろうと思います。そういう観点からしますと、地域の人間関係がどんどん弱まっていくというのはある種、矛盾だということになります。つまり必要だということがわかっていながら実際には人間関係が弱まっていくという、わかっているが、やめられないではなく、わかっているけど、できないという状況があります。この一種の認識と行動の間にあるジレンマというものが大きな問題になっているのが、今日の姿なのではないかと思います。

じゃ、どうすればこのジレンマを解消できるのか。地域の人間関係や地域活動が重要だということはわかっている。でもそこにはあまり参加したくないという「ずれ」、これを解消するものが何か必要になってくるわけです。先程紹介しました内閣府の調査の中で「なぜ地域活動に参加しないのか」という理由を聞いています。地域の人間関係をなぜ重要視しないのか。その答えの中で約半数の人が「親交を深める機会がない。つきあう機会、仲良くなる機会がない。チャンスがない」ということを指摘しております。わかってはいる。意識としてはあるんだけど、きっかけがない。チャンスがないということの現れではないかと思います。であれば、いいチャンス、きっかけをつくればいいということになるわけです。そのためにいろいろ地域では活動を模索しているわけです。イベントをやる、お祭りをやる。それはそれで大変結構なことですし、努力も評価できるかと思いますが、どうしても地域にはいろんな年齢の人、職業の人、居住している期間、いつから住んでいるかという居住期間がばらばらになっています。それが現代の地域社会の特徴だと思います。そういう多様な人が住んでいる地域の中で、皆が参加できる、興味を持てるようなものは、そうそう簡単には見つからないわけです。したがって、この「ずれ」、ジレンマを解消するのは容易でないということなんですが、今日のテーマに引きつけて言えば、その一つにスポーツというものの可能性があるのではないかということです。

つまり、スポーツを使って地域の中での人間関係をつくっていくきっかけをつくる。私はスポーツで人間関係がすぐに親密になるというところまでは、そう簡単には期待できないとは思いますが、きっかけはつくれるのではないかと思います。先程、大谷先生のお話の中にご紹介がありました文部科学省が推進しております総合型地域スポーツクラブという考え方は、まさにそういう発想に立脚しているのではないかと思います。スポーツクラブを地域という単位でつくることによって、そこに地域の人たちの人間関係や地域に対する思いを高めていこうという趣旨や意図があると言っていいかと思います。

皆様もよくご存じの総合型地域スポーツクラブとしては、愛知県半田市の成岩スポーツクラブが大変有名な先進事例、成功事例として紹介されます。そういう成功した、先進的な取り組みがあって、全国的にも数が増えてはいるんですが、では本当に地域の人間関係とか地域活動の活性化にとって総合型地域スポーツクラブは完全な解決策になったんだろうか、問題解決したんだろうかというと、まだそこまではいってないなという気がいたします。なぜそうなるかということについては、総合型地域スポーツクラブの組織の問題、体制の問題があります。総合型地域スポーツクラブは文部科学省が中心になって地域に導入してきた仕組みです。文部科学省は各地方の教育委員会との関係の中で政策を展開しています。しかし昔から地域とか、近隣社会というものを扱っていたのが役所の関係で言えば、国で言えば総務省、昔の自治省です。それは各市町村の教育委員会とは別になっている市長、町長、村長という首長部局です。そこがコミュニティ政策、近隣政策をやっています。いわゆる役所の縦割り的な関係がありまして、現場レベル、地域レベルで文部科学省系統の話、総務省系統の話が一体的になって、うまく展開していないという問題が一つあります。

もう一つ組織体制に関係して言えば、行政がこういうものを推進しますと、最初、導入時期に補助金を出しまして、成岩スポーツクラブもそうです。何かするにはお金が必要ですので、補助金が出ることは一つのきっかけになって動くんですが、補助金はずっと続くものではありませんで、ある一定期間で切れてしまいます。まさに金の切れ目が縁の切れ目になってしまうという行政の安易な補助金手法が背景にあって定着しない、発展しないということがあります。

そういう意味ではなかなか決定打にはならないのかなという気がします。それが大きな理由だと思うんですが、しかし今日、申し上げたいのはもう一つ大きな理由があって、スポーツが可能性を秘めながらも地域の人間関係、地域の活性化に活用しきれない、貢献しきれていないのではないかという理由は何か。

スポーツの有効性、有用性、役立つということについて、実はまだ理解が十分ではないのではないか。一般の人はそれほどスポーツというものに対して理解していないというのが私の正直な感想です。毎年、スポーツ政策シンポジウムをやっていますが、横山先生の狙いはスポーツ関係者が多く来られる中で、一人だけスポーツにあまり関係ない人間が、スポーツに冷や水を浴びせかけるという嫌われ役をやるのが私なんですけど、ここから先は嫌われ役の話なんですが、世の中、スポーツというのに大変、関心を持っている人、興味を持っている人がいることは事実です。とりわけこの会場にお越しの皆さんはスポーツに対して非常に興味、関心がある。スポーツ好きの人が多いだろうと思います。たくさんお集まりいただいていますが、明らかに全人口の中では何％の人が来ているにすぎないわけです。大多数の人はテレビでスポーツ番組をやっていたら見るとか、たまには実際にスタジアム、競技場に行ってみることがあるけれども、じゃ、自分がスポーツにかかわって何か行動するか、参加するかとなると、そこまでやる人はあまりいないのではないかと思います。私自身がそうなので、わりと自信を持っていっているんですが。そういう状況が現実にはあると思います。スポーツの有効性、有用性は何となくはわかっているのだけれども、じゃ、何か行動するか、身銭を切ってでも何かやるところまでいく人は、そうはいないというところが、スポーツは可能性を秘めていながら地域のハブになりえていないのではないかなというところです。

ではどうするか。とりあえずスポーツに対する興味、関心をより広げていくことが必要なんだろうと思います。あまり結果を焦ると却って失敗すると思いますので、まずは少しずつ底辺を広げていくことが必要なのかなと思います。そういう意味では現にスポーツにかかわっている人が、どういう役割を果たすかということが重要ではないかと思います。スポーツの楽しさ、スポーツの持っているさまざまな機能をどれだけ一般の人に広げていけるか。そしてせいぜい見るくらいの人が、かかわる、参加するところまで少しずつスポーツに対するかかわりを強めていくことが必要ではないか。いってみれば条件整備、環境整備から着手せざるをえないのかなというのが私の正直な感想です。

今日はこの後、お話いただきますのは同志社出身者で、同志社が誇るトップアスリートの３人の方です。日本の誇るトップアスリートですが、こういう方々が今までの経験、現に経験されていることをベースに、スポーツのよさ、楽しさ、さまざまな機能を実感を持って、実態性をもって紹介していただくことは、スポーツに対する関心を広めていく上で非常に有効な手段になるかと思います。そういう点では皆さんに対する期待は大きいのかなと思います。そういうことを通してスポーツというものが地域社会にとっても、国全体にとっても有用なものだという認識が高まっていけば、国や自治体がそれに対して協力をする、税金を投入するということに対して一定の正当性が出るのかなと思います。スポーツというもの自体に一種の公共性が出てくるわけです。個人が楽しんでいること、商売としてやっているということで終わると公共性がそこには認められないのですが、いや、地域の問題、人が生きていくこととの問題、治安、安全・安心ということにもかかわってくるとなれば、明らかにそこに公共性が発生します。そうなればスポーツの教育力というものが実際に地域社会の中でも生かされていくのかなという気がいたします。

そんなお話をすることによって、これから後の３人の方の話が、これからの日本の社会にとってどれだけ意味があるかということを、一応、大学院の研究科の立場から整理させていただいたというわけでございます。この後、今日の本番が始まりますので前座の話はこれくらいにさせていただきます。ご静聴どうもありがとうございました。

〈横山〉どうもありがとうございました。真山先生には、いつも関係者だけで盛り上がるなと、きついが有難い言葉をいただきまして、今日もお役目を演じていただきました。今後ともよろしくお願いいたします。

キーノートレクチャー　私がスポーツから学んだもの、そして伝えたいもの

片岡篤史（プロ野球元阪神タイガース）
奥野史子（スポーツコメンテーター）
大八木淳史（同志社大学大学院総合政策科学研究科後期課程在籍中）
（元ラグビー日本代表）

〈横山〉それでは再開いたします。３人のトップアスリートからそれぞれの種目のキーワードについてお話していただきます。最初にトップバッターとして片岡篤史さんからよろしくお願いいたします。

〈片岡〉僕はご紹介の通り、PL学園から同志社大学に来ました。僕が中学３年生の時、桑田さん、清原さんがPLの１年生の時の中学３年生でした。全国の野球少年がPL学園に行きたいと感じた時代だと思います。京都の学校に行くか大阪のPLに行くか悩んだんですけど、PLに進ませていただきました。１学年20人しかいないんです。PLに行けば甲子園に出られると、甲子園で優勝できると思って行ったんです。清原選手は早稲田のハンカチ王子と言われる斉藤君と今回、大阪桐蔭からプロ野球に行った中田君が同じチームにいるような感じのすごい人です。中田君が試合を一緒にしていたら清原さんならホームラン200本くらい打っただろうという選手でした。そういう選手が僕らの学校におりまして、まずPLで教わったことは感謝の気持ちを持ちなさいということと、何に対しても不足な気持ちを持っちゃいけないということです。何をするにしても、何々させていただく、打たせていただいた。ちょっといいからといって調子に乗るなということと、だめだからといって下を向くなということを教えてもらいました。

絶対優勝できるだろうと言われた桑田、清原さんが春の選抜大会で、ベスト４で負けました。僕たち１年生が６時に起床して雑用をしないといけないんですが、その時、桑田さんが、朝、練習を終えて汗だくになって帰ってこられる姿を見て、こんなすごい選手でもこんな練習をしなきゃいけないんだと学ばせていただきました。春の選抜ベスト４で負けられた清原さんが寮に帰ってきたのが２時くらいでしたが、それから夜８時くらいまでぶっ通しで練習されていた姿を見て「こんな人でもこんな練習しないといけないんだ、それでも日本一になれないなら、俺たちはどれだけ練習したらいいのだろう」と思ったのが昨日のことのように思いだされます。

先程、僕、エリートと言われましたが、決してプロに行けるような選手でもなかったし、そんなにたいして、いい選手ではなかったです。春の選抜に出た時も僕は７番バッターでした。その時にPLで「徳を積む」というんですけど、ごみが落ちていたら拾いなさい、と。あまり僕、活躍できなかったんですが、朝早く起きて、一人でごみ拾いをすることにしたんです。落ち葉は掃いても、掃いても落ちてくるから落ち葉と言いますよね。はじめはこんなんしても一緒やな、と思いながらやってたんですけど、その時、一緒に誘ってくれた同級生の今、中日ドラゴンズにいます立浪君と一緒にやったんですけど。掃いていくうちに心が無になるというか、邪念が取り払われるという心境にさせてもらいました。そこから僕も精神的に、打席でも無にならなければいけないし、邪念とか、欲があると、なかなかいい結果は生まれない。それも教えていただいて、PLは春夏連覇させていただきました。史上５校しか春夏連覇はないんですけど。僕ら高校部員17人しかいないんですけど、17人全員が春か夏のメダルをもっているという学校は多分、僕たちの学校だけだと思います。だから今でも仲がいいし、寮生活で助け合うというか、自分さえよければいいということは一番いけないことと教わって、またそれがスポーツのいいところだと感じさせてもらったんです。

昔から僕の親戚がこの同志社の近くにいまして、小さい時、御所で鳩にパンの耳をあげている時に、この同志社に行きたいなと思って入れていただいたんですけど。部員が30人くらいしかいなくて、少ない人数の中で大学野球をさせてもらいました。野球のオフシーズンだけ学校に行けば単位がとれるという大学も多数あったんですけど、この同志社というのは一般学生と一緒に授業を受けないといけない。僕も授業を理由に練習もさぼれたんでけすけど。一学年上にオリンピックに３回出られた杉浦さんがおられたり、１学年下にはヤクルトで頑張っている宮本がいたんですけど。学生時代によく監督が「高い学費をご両親に払ってもらっているから

俺たちはお前たちを怒る」と言ってよく叱られました。監督さんがホテルマンということもありまして電話の対応、礼儀を厳しく教えていただきました。

フェアプレイというのを久々に辞書を引いたら、ウソをつかない、公明正大な気持ちでゲームに臨む。アマチュアの時はフェアプレイは当然のことです。審判にクレームをつけてもいけないし、相手に文句を言ってもいけない。人間は誰でも楽したいという気持ちがあるじゃないですか。練習がしんどかったら、監督が見ていなかったらサボるとか。誰だれが見ているから一生懸命やるという気持ちは、絶対、人間どこかにあると思うんです。あるコーチに「55,000人入っている甲子園の決勝戦で一生懸命頑張るのに、田辺の誰もいないグランドではお前、一生懸命頑張らへんのか」と言われまして、それが僕の４年間の学生生活の中で非常に心に残ったことです。ひたむきにしないといけないと学ばせてもらったり、４年生になっても部員が少なかったものですから雑用をしないといけなかったので、同志社に学ばせてもらって非常に勉強になったと思います。野球部の中には一浪して入ってくる学生もいれば、僕たちのように高校から野球をやって大学に入れてもらった人間もいるわけで、一般学生の中でも学校に行ったことによっていろんないい友だちができたことも、僕は同志社に来て非常によかったと思います。

プロ野球でもフェアプレイはフェアプレイなんですよ。皆、プロ野球のゲッツーの時、１塁ランナーが２塁にスライディングしますよね。その時に２塁ベースに滑らないといけないんですけど、セカンド、ショートが２塁に入ったら、こかしにいくわけですよ、スライディングして。それを交わしてゲッツーとるのもプロのフェアプレイなわけです。プロというのは、やっちゃいけない場面もありますけど、それも普通にするのがプロのフェアプレイなんです。当然、野球ではインコース投げるのも一つの技術だし、その技術に対して怖がってはいけないし、そこは踏み込んでいかないと。たまにプロ野球はわざと当てるんですよ、デッドボールを。それもわかっていてフェアプレイだ、と。２遊間同士だったら、お互いにそういうことをしてはいけないとわかっているんですけど、接戦になってセカンド、ショートをこかした時も「あ、ごめんな、悪かったな」という一言がフェアプレイであると思います。

ボクシングや相撲でテレビの視聴率を上げるためにということが問題になっていますが、昔、ボクシングでマイク・タイソンという選手がいました。ものすごく強いヘビー級の選手。あの選手は何が強かったか。パンチを与えた後で、もう一回肘で打つ。それもプロの技なんです。それを交わしてこそフェアプレイだと思うんですね。今回、亀田君がああいう結果になりましたが、皆さん、あれを見てて、どうですか。年上のチャンピオンを罵ったりしていましたが、あれはあれで亀田は若いからいいと思うんです。あの後に残念だったのは、スポーツマンとして、終わったら「ありがとうございます。お互い、いい闘いでした」と言うんです。今のボクシングを見ていると、今回皆さん注目したのは日本人同士やから注目したと思うんです。ボクシングは外国人と日本人の闘いが多いじゃないですか。昔、薬師寺と辰吉の日本人同士でやりましよね。辰吉もお互い、文句をいいながらも、終わった時、辰吉が負けたけど、薬師寺を持ち上げましたよね。あれがスポーツマンのフェアプレイ精神やと思うんです。亀田君、まだ若いし、スポーツは失敗してまた取り返せる時がありますからね。そういうふうな気持ちを持ってフェアプレイ精神でやってほしいと思います。相撲界だってビール瓶で殴ったと問題になっています。スポーツなんて、そんなきれいごとではできてないんですよ。ただ僕らだって高校時代は殴られるのはいけないけど、気合も入れられますよ。顔が大分歪んでいます。男前やったんですよ。絶対、負けたくないという気持ち、頑張るんだという気持ちから出るんだと思うんです。相撲取りは身体もデカイから、ビール瓶で殴らないといかんこともあるかもしれへんけど、絶対いけないことですけど、殴られていたら加減がわかると思いますよ。今の子、加減がわからない。僕らも殴られたし、殴ったし。加減して殴りましたよ、ほんまに。

僕たちも野球をやらせてもらって最後に残る選手はハートのいい選手やと思います。フェアプレイ精神をもつ選手がハートのある選手やと思うんです。単に、打った、投げた、勝った、負けただけなら何も面白くないわけですよ。そ

こに行くまでに野球やったらアウト１個とるために、ものすごくしんどい練習をして、それに耐えてこそ舞台に上がるというね、今日、その気持ちを持ってタイガースが勝ってくれることを祈っています。ありがとうございました。

〈横山〉プロのフェアプレイというのは難しいですね。阪神の模様は後でお聞きすることにして。次に奥野さんからよろしくお願いいたします。

〈奥野〉片岡さんが場をあたためてくださったので話しやすいんですけど。「克己心」がテーマなんですが、シンクロって皆さん、されたことはないんではないでしょうか。スポーツには見るスポーツとするスポーツがあると思うんです。この中にスポーツをされてきた方はたくさんいらっしゃって、野球をされてきた方もラグビーをされてきた方もあると思いますが、シンクロというのは、やったことがないと思うので、水中プレーがどういうふうになっているのか想像しにくい世界だと思うんです。ただ言えることはとにかく忍耐あるのみのスポーツなんですね。見ていただいたらわかるように、まず息を吸いたくても吸えないんですよ。顔を上げたらだめなんですね。一つの演技の中で一回潜りだしたら１分くらい上がってこられない。ただ１分じっとしているわけではなくて大腿筋を使ったり、身体を使って、酸素を思いきり使っていますから、普通の１分の５倍、10倍くらい、もっと苦しい世界なんですよ。なので､そういうベースから始まりますから、とにかく耐えなければいけない。

しかも私のコーチは井村雅代コーチと言いまして、笑いが出るくらいなんですけど、本当に世の中にこんなに厳しい人間が存在したのかというくらい厳しい方なんですね。井村雅代コーチに小学校６年生の時から見ていただきまして、それはそれは、井村先生との闘いであり、己との闘いであり、人に勝つ云々より前に、そこがまずスタートなんです。それはスポーツだけではなく、ピアノをやっても芸術をしてもそうだし、勉強してもそうだと思いますが、まず自分に勝たなくては前に進まない。それを自分に教えてくれたのは井村雅代氏であり、シンクロというスポーツであり、私が小学校１年生から始めたんですが、大学を卒業する22歳までそのスポーツに携わってきて学んだ、一番大切なことだったんですね。

まずシンクロの練習はどんなことをしているか。よくバタフライを泳げますかと聞かれるんです。バタフライ泳げない人間に足を上げられるわけがないじゃないですか。まず４泳法をきちっと泳げて、インターハイとかに出られるクラスのスピードでシンクロの選手は泳げるんですよ。だから競泳から引っ張られるくらいですけど。私たちはシンクロを選んでやってるんですね。シンクロの練習に入るまでに朝起きて、競泳の練習を２時間、３時間、普通の競泳の選手より時間がないのでインターバルをきつくして短い時間にたくさん泳ぐトレーニングをするんです。朝ご飯を食べてまたシンクロの練習をして昼ご飯を食べてまた泳いで、晩ご飯を食べて、その間にウェイトトレーニングが入り、ビデオで自分たちの動きをチェックして、その後、ミーティングがあって、夜、プールが空いている時があるんですよ。閉めといてくれたらいいのに開けておいてくれるんですよ。遅い時だったら10時、11時まで１日、短くて８時間くらい、長いと10時間、12時間くらいプールの中に入っている日もあるんです。

そんな毎日の中で自分に負けそうになる時もあります。練習に行くのが嫌やな、と思います。そこで一回練習さぼると、１日一回の練習をさぼると、３、４日、その感覚には戻らないんですね。それくらい毎日毎日の積み重ねで一つの技、一つの技術が身につくので、そこで一つやめてしまったら戻るまでまた３日かかるんですよ。そんな自分になりたくない、その時間が勿体ない。１日休んだら３日前に戻ってしまうという思いと、あとはチームで動いているので、練習休んでさぼったらチームメイトは苦しい練習をやっている、今頃、足を上げてやっているやろな、とチームの流れがあるので、自分一人楽をしたら、楽をしたという思いの方が苦しかったりするんです。なので、その日の練習をやめずにやれるんです。それは結局、自分に打ち勝つということもそうですが、周りのメンバーがいて、怖い井村コーチがいて、チームメイトに支えられているということでもあります。

そんな中で最初は自分に勝てなかったものが、だんだん勝てていくようになる。家族の支えもそうです。選手の時は自分一人でやってい

ると思いがちなんですけど身体の管理、食べ物の管理とか、シンクロは食べないといけない。１日5000キロカロリー以上食べるんですよ。一般の女性が2000キロカロリー前後なので、２～３倍近く食べるんです。その食事をつくるのは母なんですよね。ただトンカツ食べさせればいいとかではなく、きちっと筋肉をつけないといけない時だったらタンパク質多め、試合前だったら炭水化物多めとか緻密な計算があって、栄養士の方についてもらって、そうやって周りに盛り立ててもらって自分自身が強くなっていくんです。

己に打ち勝つというのは、私が一番感じたことは自分が負けた時に、競技で負けた時、その自分に打ち勝つことが一番難しい。たとえばシンクロという競技は世界に行くと基本的にはメダルを取って帰ってくるんです。オリンピックとか世界選手権をごらんになったら、またシンクロがメダルを取ったなと。いつもメダル取っています。取れないことも最近、たまにはあって今度の北京では危なかったりするんですけど。メダルを取ると信じているんですが。危ないながらも日本はメダルを取ってくる。その中で92年、バルセロナで銅メダルを取って、翌年、大学３回生の時、93年のワールドカップの大会でメダルを取れなかったんですね、ソロで。一人の演技で。シンクロでメダルを取らないで日本に帰ってくることはありえないんです。シンクロ界でありえないことが起こってしまったと、歴史上の汚名を自分の名前でつくってしまったんです。シンクロは今、負けたから次にまた勝てるという競技ではなく、採点競技なので人が判断するじゃないですか。１回、日本が負けたとなると、そこからまた盛り返すのが非常に難しい。一度３位から４位に転げ落ちたら、そこから上がるのはすごく大変なことなんです。負けまして日本に帰ってきて、うちひしがれました。自分自身はベストの演技をしたつもりなのに負けたんですね。ロシアに負けたんです。世界でトップです。初めて負けたのがその時だったんです。それまでオリンピックの時とか、親戚が増えるような勢いだったのが、ワールドカップで帰ってきた時は誰も空港に迎えに来てくれませんし、迎えに来てくれたのは家族くらいですよ。その時に世の中の現実を目の当たりにしました。負けるということは非常に恐ろしいことだなと身を持って体験して、すごく理不尽な思いもしたんです。ベストを出したつもりなのに負けた、と。採点競技に対する思いもあったりして。

もう一度トライしないと自分自身、この後、人生生きていく中で、ここで負けたままやめたらこの後の人生は負け犬で終わってしまうと思ったんです。そこでもう一度やり直して始めたのが「夜叉の舞」という演技だったんです。普通シンクロは笑顔なんです。水から上がってきて苦しいのに、なんで笑顔やねん、というくらい笑顔なんですけど、初めて笑顔じゃない演技をしたのが「夜叉の舞」だったんです。その時、負けて悔しかったから、負けてすべてを一瞬にして失った。その時の悔しさがあったのと、ここで自分に負けられないという思いが、負けてさらに強くなったんですね。スポーツをやって勝つって楽しいことだし、勝ったらうれしいし、いいんですけど、スポーツやってて、負けていろんなことを得たと思うんです。負けることによって、そこからどうやってはい上がるか、何をつかんではい上がるかということを学んだんですね。己に勝つことをスポーツから学びましたし、辞めた後にその大切さはさらに増しています。

現役を辞めた時は私自身、シンクロのこと以外何も知らないような感じでした。１日12時間も泳いでいたら新聞読む時間もないし、本を読む時間もないし、テレビ見る時間もないという生活していたんです。ある日突然、下界に出た途端に、下界ですよ、ほんとに。突然、何も知らない自分に向き合わなければいけないんです。その時に「ああ、もうこれはだめだ。何かにすがりたい」と思うんす。それで結構、新興宗教に行ってしまう人とかがおられるんです。スポーツを究めた人は、何かにすがりたいんです。何か目標にすがりたいんです。その気持ちがわからないでもないんです。何か目標があって生きてきた人間にとって何かに向かいたい、と。そこに自分に向き合って自分に勝たなければいけないので、私はもう一回、勉強しようと思って同志社の総合政策科学研究科に行きました。スポーツコメンテーターの仕事も始めました。カメラの前に立った時にコマーシャルのタイミングすらわからないです。初めてスタジオに立った時、毎日、うちひしがれるような気持

ちで「今日もこんなコメントいわれへんかった、今日もこんなコメントいわれへんかった。言いたいこといっぱいあったのに」と毎日、タクシーの中で泣きながら帰ってきたんです、関テレから。片岡さん、関テレですけど。

〈片岡〉僕、笑いながら帰ってきた。

〈奥野〉ほんとに泣きながら帰ってきたこともあったんですけど。人生のステップでいろんなことが起こりましたが、その時にスポーツで「あの時よりしんどいことはない」とか、そういうことがベースにできたので今の人生を明るく楽しく生きていけるんじゃないかなと思っています。スポーツからいろんなことを学びました。今日は阪神が勝つことを祈って、このへんで終わります。

〈横山〉ありがとうございました。どうも今日のキーワードは阪神タイガースになりそうですが。奥野さんと日頃接していますと、おっしゃるように自分に打ち勝つ気持ちが強くて、お話を伺っていましたら、世界陸上で朝原さんが活躍された背景にある家庭の強さもよくわかりました。大八木さん、よろしくお願いします。

〈大八木〉こんにちは。実はえらいプレッシャーを感じておりまして。ご縁がありまして同志社大学大学院総合政策科学研究科というところ、博士課程です、「どないしたんや」と横山先生には。そこに在籍させていただきまして真山先生は私のご指導の先生でありまして「アカデミックな話はちょっとするのやろな」と打ち合わせの時にネジを巻かれまして。片岡選手が巻きで終わられまして、準備する間もなく奥野さんは朝原選手ののろけ話でも言うてくれはるのかなと思ったら苦労話で終わりました。

さて大八木、どういう話を持っていこうとかなと、頭脳の中で構成が終わってない状況でございます。そや、タイガースもええけど、全世界は、ラグビーは今、ワールドカップに盛り上がっていることを皆さん、忘れてもろうたら困るな、と。本日、朝の5時から、日テレで準決勝の中継やっていました。イングランド対フランス。ピンとけぇへんのやな。「タイガースの下柳、何してたんや」というとワーッと沸くのにね。なんで下柳やったら沸くの。僕、大親友でね、あいつ、チームメイトより犬の方が大事ですからね。イングランドとフランス、14対9でイングランド。ラグビーの母国、発祥の地が、戦前の予想は弱かったんですわ。今年のイングランドはあかんでと言うてたんですが、何とかトーナメントをやっているうちに強くなってきました。ラグビー協会がホッとしている状況です。開催地であるフランスが負けたということで、フランスでは大変な問題が今後起こりそうやな、と。

片岡さんはベースボール、奥野さん、シンクロ、日本語やと思っとった。この二つのスポーツ、私は、ちょこっと違う観点から説明しながら、皆さんも一人はタイガースファンよりも神戸製鋼スティーラーズのファンになってほしい。サマースポーツがベースボールでウィンタースポーツがラグビーで、一人でも多く増えればいいなと思うんですが。野球にしても歴史的背景があります。クリケットから野球はベースボールになったんと違う。野球はわかりやすい。ピッチャーがどんなけ速い球、この間、テレビでやってました。200キロのバッティングセンターで、こんなガキが打ちよるんですわ。松井も打てへんかったと。どんだけ速い球を投げるか。木で打ち返して、どんだけ、よう飛ばすか。こういうスポーツ、すばらしいスポーツ、数値化されて、なんぼですね。先だってシンポジウムの打ち合わせで片岡さんと一杯やりました。口すべったんです。「片岡、お前辞めたからええやん。なんで関テレみたいなしょうもないところでやってんや」。ウソですよ。もっとメジャーなところで。もとい。「片岡、お前な、我々、人生、生涯賃金ですやん。サラリーマンとしたら3回分、お前人生できてしもうた。もうええやん」。片岡どう言うたか知ってます？

「僕は6回分です」「おい、そんなけあんのや、金」と思いながら、簡単に言うならばエンターメント性のスポーツです。数値化です。何打数、打席で、なんぼ打てたか。ピッチャーが何勝するか。何セーブするか。わかりやすい。勝ち負けにこだわって、それによってインセンティブでお金をもらえるわけです。

またまたシンクロの奥野さん、エモーショナルな感じが必要と聞きます。人が採点して金銀銅、賞状、当然ゴールドメダリストはヨーロッパかアメリカのスポンサーがついて、何ちゃら賞で、またいけるんですよ。奥野さんは知りませんよ。はてさて私のラグビーでございます。ノーサイドです。フェアプレイじゃなかったか

らね、野球。がっくりしたんです。僕がフェアプレイの話をしたろか、と。

「ノーサイド」です。講演でノーサイドの話をするんですが、一つはこういうことなんです。ラグビー、見てたらわかると思います。15人です。15人になったのも、つい最近です。イングランドのケンブリッジ、オックスフォードが初めて共通のルールをやって15人の選手でやって。そのひと昔前はフットボール・アソシエーションでした。まあ、蹴ってもええし、何してもええやったんですね。それがフットボール化した。ハッキングしたり、危ないからサッカーになって、別もんでラグビーに来るわけです。トライといいますやんか。５点です。この大会で何トライしたか。大畑選手、京産大で今、神戸製鋼。ギネスに載ってるんです。世界最多トライです、テストマッチにおけるトライも、90メートル独走してのトライもあるし、ここ、ひょいとまたいでやる奴おりますやん。僕、得意やったんですけど。それも同じ５点は５点です。トライ。でも18世紀頃、トライ、実は０点やった時代がある。サッカーから歴史が入ってきて。なんでやねんいうたら、トライした後、そこまで垂直線上で、キックでコンバージョンキックです。今、２点です。トライは何の意味かというと、キックをできる権利やったんですね。だからフットボールからラグビーは展開された。それでわかるわけです。そらね、トライする方が大変ですわ。ワーッと人がいますから。それもようやくイギリス人もわかってきよったんでしょうね。トライの方が非常に価値観が上がっていますから。

実はローマ時代から500年くらい歴史があって、今はラグビーという、ワールドカップという、僕らが見るパリコレよりも人が見てるんです。20億人がラグビーを見てるといわれるんです。世界で100カ国、やられている。サッカーは200カ国です。負けてますわ。歴史が深いですわ。その背景の中でラグビー、即ち、500年をかけて熟成された、変化させられたスポーツであって、決して近代的なベースボール、わかりやすくて、お金にしやすい、シンクロもそうです。しかし500年前からああじゃ、こうじゃ、今なんかトライしたら、インカムしてビデオで見るんです。昔なんかトライですよ、した方がわかるのに、ウソつく方もわかる。トライやん。トライちゃうとわかるんです。でもレフリーが一旦ピーと笛吹いたら絶対、ノーカウントはない。トライはトライ、違うは違う。今はビデオ、カメラもね、ハリウッドばりですよ。何台カメラあるか。レフリーもプロなんです。ミスジャッジしたらもらえない時代。それくらい変化しているラグビーなんですが、ここでノーサイドの掴みに持っていきたいと思うんですが。

ワールドカップ見てても、今、「ノーサイド」と言いませんわ。イギリス人とヨーロッパ人は「タイムオーバー」と平気で言います。日本に残った、いうなら武士道に共通する言葉です。イングランド、大英帝国と呼ばれました。我々日本はある意味共通点があります。極東地区の日本になんでラグビーが普及したか。植民地とかに属する国はラグビーが多い。しかしいろんなところを飛んで、インドもやってますよ、スリランカも。バーッと飛んで日本へ来た歴史的背景は何か。騎士道と武士道は共通点があります。試合が終わります。ピー、ノーサイドです。敵も味方もなくなる。僕らの時代は勝った奴は喜ぶなと言われた。なんでかな、と言うたら、負けた方を指さされて涙する大男がいます。甲子園で言うたら砂入れているところですわ、バーッと。このノーサイドの笛が鳴るまで、勝利というモチベーションをもちながら汗かき、血を流して、涙も流して、友だち同士で遊びにいきたいのに練習してきた。でもわずかの判断ミス、２つや３つや４つ、多かった分、我々が勝たしていただいたんちゃうけと言われました。京都弁出ました。すみません。「そうきぃ」いうのは高知弁です。「あ、そうや、喜ばんとこ」、と。今、喜びまっせ。ほんまに言いますけど、東海大暁星のガキもトライしたらキャップ外しやがんねん。なぜかというと、今、そこにカメラ行ってるし。なるほど。僕やら奥野さんよりテレビ慣れしとんなという話ですわ。伏見もワーッいいまっせ。違う。ロッカールーム、着替えるところ。洋服置き場です。そこでこっそり喜ぼうやないか。負けた方、永遠に泣き続けるのか。そうじゃない。負けたことを一人ひとりが受け止めなあかんやないか。いつまで泣いてるんや。受け止めたら勝った奴に握手求めてくる。「次の試合頑張ってくださいよ」と言うてこんかいや。泣きながらバーッと行くんです。昨日、フランスは泣いてました。負けた方がね。

花道つくって、勝った奴に。勝った奴もまた花道つくって受け入れてやる。なんやろ。人を認めないとあかん。今流行っている言葉です。エンパワーメントです。自分が何をやるべきか、何をしようか。どう考えているか、どう行動しようか。皆さん、二人称にどう訴えるか。またまた皆さんが何を考えているか。何を行動しようか。どうしようか、それをどう受け入れようか。エンパシー、受け取り、また発信する、それにはラグビーは500年前からルールを構築しながら、まずチームというコミュニティがあって、相手のコミュニティがあって、それを支えるスタッフのコミュニティがあって、それの勝ち負けで盛り上がってパブに行く。またまたコミュニティがある。ということは、人は一人で生きていけへんということをラグビー、即ちノーサイドの言葉を用いて教えられているのとちゃうかなと思うんです。

私、現在、高知県中央高校に行っていましてラグビー部のGM、フォードより上でトヨタよりちょっと下。ウケたわ、よかった。さっき楽屋でやってウケへんし、どうしようかなと。ウケた、ウケた。ゼネラルモーターと違いますよ。ゼネラルマネジャーですわ。何やねんと言いますと新しいポジショニングです。学校の教師で部活のラグビーをみる顧問です。またまたラグビーだけを外部者からコーチングとして呼ばれたものです。GMです。なんやねん。勝ったら俺の手柄や。負けたらその下にいる監督のせいというのを実はできるポジションです。前々から平尾君は、そのポジション、そんなことを言うたらいかん。今、いろんなことを研究しながら新しいスポーツによって真山先生の言葉をお借りするならソーシャル・キャピタルです。スポーツを社会資本にしようやないか。産業界、官、コモンにしましょう、公に。学、学校です。民、僕ら市民。その４つ、いうならリレーシップ、ガバナンスをしようじゃないか。

うちは野球とサッカーがメインです、四国ですから。ラグビー部、ある理事長が来て、野球もできへん、サッカーもできへん、中卒より高卒の方がええからと。そいつらまとめてくれへんか。しかしながらグランド見たら、野球、サッカー、どうしましょう、理事長。グランドは野球、サッカー優先です。あんた、つくるいうたくせに。市役所へ行きましょう。市長に会いに行きました。すぐ会いました。なんで？　大八木篤史がトップアスリートやったからです。教育長もいました。理由説明しました。やっぱり野球が高知では伝統です。サッカーもこれからJリーガーが一人でも増えれば高知のためになります。ラグビーは誰でもできる、しかも社会性を持っている、子どもたちへの教育力がある。ウソばっかりです。市長言いました。「あ、そうですか。遊ばせている市営のグランドあります。週に１回、ゲートボールやってるだけなんですよ。邪魔でしょう。そこ使ってください」。ウソですよ、邪魔言うてませんよ。わかりました。次の日行ったんです。さあ、練習や、と。７人半おったんです。半分というのはいろいろあってね。家裁にいっとったんですけど。それはいいんですけど。７人半でやろうや。芝生のいいところです。120×90メートルです。ごっついです。ポールはないですよ。やろうとスパイク履いたら、看板に書いてある。「グランドの使用上注意。ラグビー、サッカーは禁ずる」。おい。１行目からあかんやんけ。しかしながら行政ですよ。縦割りですわ。すぐにグランドキーパー、トラックに乗ったおっさん来て、バーっと白のスプレー持ってきて「大丈夫です、上から消します」。シューッです。使えるやん。簡単やん、行政なんか、イチコロやんか。これ、ええな。そこには民間の小さな企業がお金を集めて、可動式ですがラグビーポールを寄付していただけました。そうすることによって四国の徳島、香川、愛媛から「ええグランド、大八木さんとこ、つくったらしいやん」と言うて来て、彼らは缶ジュース買う時、高知の自動販売機で買いますからね。売上、上がるわけでございます。まず行政のパイプ役になったやんか。実は11月25日、高知県知事選があります。あの橋本大二郎様が今回は出ないという。で、本来、中央高校、こうなった学校を再生した理事長がいるんです。それがラグビーをつくるという発想で社会的弱者、母子父子家庭に何らかの公平な教育を受けさせようとした彼自身が、地方自治体の首長ですよ、上に立った方がええんと違うかということで「俺、出る」言うて、昨日、知事選立候補の発表しはりました。実は学校、産公学、学校関係者も何らかの形で大八木が、トップアスリートがいけば、動きをおこしたわけでございます。

ほんとにドロップアウトした連中ばかりで、教育的な観点からいうと一杯あるんですが、一つだけ申し上げますと、サッカー部から「お前やめろ」と言われた一人の２年生です。彼も７人のうちの一人でした。細い子どもで「飯食うとんのかな」。金髪もこんなになってるんですよ、手入れしてへんから。ピアスも７つくらいあいてる奴です。まあ、ええわ、練習やらせた、バーッと。きたないんです、サッカーの練習着が。フケだらけです。「おい、きたないな」。「余計なこと言うな」と向こうは思ってる。「風呂入ってるのか。こら。お母ちゃんに言うて、風呂くらい沸かしてもらえ」。サッカー上がりのラグビーに入ってきた子に、ですよ。３日くらいして。「GM、僕、お母さんいない」。アッチャー、いらんこと、言うてしもた。父子家庭や。京都人の悪いところですわ。それで違う話にお茶を濁せばよろしい。「親父に言うて、風呂沸かしてもらえ」。「GM、お父さんもいません」。両親おらへん。ファー。「どうしてんの」。「親戚のおじさんと暮らしている」。「あ、親戚のおじさん」。「トラックの長距離の運転手で月に２、３日しかいない」。「晩御飯、どないしてるねん」。「コンビニ弁当」。「今日、一緒に晩御飯食べに行こう。ずっと食べよう」。次の日、教頭に彼の歴史を尋ねたわけです。僕も傷を負いました。こう言いました。小学校の頃、両親が自殺してる前に座っとったんです、あいつは。アッチャーでした。「どないしましょう」。「その件に関して彼は立ち直っているはずです。普通に接してやってください」。春が済んで彼は活躍しました。しかし夏休み、どの部活も夏合宿に行くわけです。夏合宿は実際に経費がかかるわけです。伏見でも保護者、10万くらいいきますわ。小遣い入れたらもっとですわ。夏合宿、京都まで行く。学校が半分、みたると。学校のスポーツ制度がありました。半分自己負担です。彼は我々に言わんと担任に「学校辞める」、と。深く突き詰めると「親戚のおじさんにこれ以上経済的な負担をかけるのはしんどい」と言いまして、夏休み中、合宿に行っている間に学校に来て退学届を持ってきたらしいです。実は黒髪に夏休みの前は変わっとったんです。「どうやったんですか？」と教頭に聞くと「金髪通り越してピンクのメッシュが入っていた」。その恰好で退学届を出してきた。「将来どうするの」。「おじいちゃんのマグロの遠洋漁業の船に９月から乗ります」。最後におじさんが買うてくれたんか知りませんが、「ミズノのスパイク、もう僕は必要ないからラグビー部の誰かに履いてくれるように言うてください。では」と帰りよった。17歳のガキですよ。彼はもう一回、茶髪、金髪にすることによって、もうラグビーには戻らんと、次の社会のステージで活躍することによって、置き土産として、負担をしながら買ったスパイクをおいて、もう二度と自分と監督の前に現れなかったという話でございます。

スポーツばかりやってきたものから言うと偏った言い方かもしれませんが、ひょっとしたらラグビーもエモーショナルな部分、社会性があるのではないか。IQからEQに変わって今、SQといわれています。近所同士のつきあい、自分の言いたいことエンパワーメントだけやったらあかんと言われてます。そのお互いで何を次につくりだすかということが、次の社会、21世紀には大事やというアメリカの研究者も多々言うております。しかし彼は彼なりにラグビーという楕円形に出会って、そういうことができたんちゃうかなと思うわけでございます。

産公学民、今日は地域の再生のハブとして、ハブをうまく回すにはベアリングが必要でございまして、ベアリングにトップアスリート一人ひとりがなれば、もっとうまく世の中が、地域が回っていくんか、どうかというところでございまして、以上を持ちまして講演、ちゃうわ、キーノートレクチャーを終わらせていただきます。ありがとうございました。

〈横山〉ありがとうございました。ほっとけば、あと１時間くらいは続きますので。どうなることかと思いましたが、ドクター生らしくテクニカルタームを入れながら、意味は後で聞いてみたいと思いますが、勉強中だということがよくわかりました。ノーサイドは１回しか出てこなかったような気がしますが。

お話によると、それぞれがきれいごとではいかなくて、大事なんだけど、それを獲得するには人に言えないこともあるということが推測されました。真山先生がおっしゃったことは、一般理解がなかなかえられない、と。きれいごとを言っているが、えげつない世界じゃないのということもあって、なかなかスポーツに一般理解が得られないというご指摘だったと思いま

す。真山先生に今の３人のお話を聞かれまして、ますます地域再生のハブとして道が遠いでしょうか、近いでしょうかということからよろしくお願いいたします。

〈真山〉いや、多分、ハブかどうかはともかくとして、大八木さんが最後に博士課程の大学院生らしく、ハブになるにはベアリングが必要で、ベアリングの一つひとつにアスリートがならないといけないという、最後、シメだけはちゃんとやっていただきました。ハブそのものかどうかは別ですが、いろんなスポーツを経験されて、現にやられている中で、外から見て伺いしれない深いいろんなことを聴くとスポーツの新しい側面が見えてくると思うんです。たとえば片岡さんの話で、走者が何とか次の走者を生かすために素人目に見るときたないように見えることもやっている。何も知らない人が見るとえげつない、きたないなと見えるんだけど、それをスポーツとして見た時、どう見えるかということがわかってくる人が増えてきたら、また見方も変わるという。そういうところから積み重ねていくと、解説者としての解説もあるのでしょうが、それだけではなく、いろんな話をこういう機会を含めてやっていただくことで一歩ずついくという意味では意味があるのかなと思いました。

〈横山〉フェアプレイということで片岡さん、後輩の選手たち、彼らはフェアプレイをどのようにとらえていると思われますか？

〈片岡〉学生ですか？　学生は一生懸命やることが一番の条件だと思います。当然、アマチュアですから、勝った、負けたはあっても最後まで最善を尽くすというのがフェアプレイに必要なことだ、と。結果を追ってしまうと、そういうことかできなくなるんですね。姑息な手を使ってみたり、アマチュアで選手宣誓をしますよね。正々堂々とフェアプレイ精神で戦います、と。アマチュアはそれでいいと思います。プロ野球はそれではあかんと、プロと名がついて、お金もからんでくるんで、それだけじゃ勝てない。プロ野球には力のある選手ばかり入ってくる。決して力のある選手が残れるんじゃなくて、結果を残した選手が残ってくるというところなので、学生のうちにフェアプレイ精神を教わって今がある。いきなりそれだけだったら、僕ももっときたない人間になったと思うんですけど。プロ野球選手って華やかに見えますけど、辞めたら寂しい世界なんですよ。ほんとですよ。笑ってる場合じゃないんですよ。

〈大八木〉そんなこと、ないんと違うの？

〈片岡〉毎年、高校生ドラフトがあって各チーム、４、５人は戦力外通告されるわけですよ。片方では華やかに入団発表しながら、片方では寂しく野球から去っていかないといけない。僕も15年間プロ野球にいたから、大体同じチームでも100 ～ 150人の選手を見てきましたよ。そうならないためにも一生懸命やらないといけない。奥野さんが言われたように初めて世間を見たという、世間って、こんなに楽しいのかなという、今まで野球をベンチから見ていますと、ものすごい難しいんですよ。こうやって皆さん、テレビ見てたら、「なんで打たへんねん、なんでこんなボール振るねん」と多分、僕のこと、野次ったはずですよ。そうでしょう。実際、ベンチで見たら物凄い野球って難しいんですよ。だから引退した時に岡田監督から言われました。「バックネット上から見たら野球は簡単に見える。解説者ばかりやっている人はコーチの考え方と違う。それをお前もわきまえて解説しろよ」と岡田監督が唯一かけてくれた言葉でした。

〈横山〉奥野さん、いかがでしょうか。もう井村さんを乗り越えられています？　気持ちの中で。

〈奥野〉一生無理ですね。

〈横山〉そういうこと、今の選手たちはどうとらえていますかね？

〈奥野〉いやあ、シンクロの場合、まずコーチが厳しいんですね。学校でそんな教え方があったら、一発で教育委員会、というようなコーチが多いです。ある意味、押さえつけられている選手もいるのはいると思います。私もある程度の年齢までは厳しくされているので、自分に打ち勝つというより、まずコーチに勝ったら自分に勝てたみたいな世界なんです。ある程度の年齢になると、自分で考える力が大学生くらいからついてきます。コーチも20歳過ぎた選手に「アホ、ボケ、カス」といかないですから、ある程度変わってきます。その時点で自分と本当に向き合うことが始まると思います。大学生になると「明日、忘れもんするな」とか言われなくなります。自分に向き合う時点は日本の教育は大学に入ってから、諸外国に比べたら遅いと思う

んですけど。そういうシンクロをやっていても、大学に入りはじめると、ある程度ほったらかしになって、井村先生でも、自分で自己管理しないといけないと言う。でも今の選手はどちらかと言うと、井村先生にも歯向かう選手が多いのではないかな、と。

具体的に言うと、私たちだったら井村先生に「帰れ」と言われて、ほんまに帰る選手、いなかったですよ。今の選手、「帰れ」と言われたら帰るんですよ。「帰ったらその後、一生無いで。あんたのシンクロ人生ここで終わるで」と急いで迎えにいかないといけないというような選手が今は多くて、なんでしょうね。なかなか人とのコミュニケーション、人の心を読めない選手が多いのかな。相手が思っていることが読み取れない。井村先生は怖い、だけどその裏に愛情がもちろんある。愛してないとあんな怒り方できないですよ、ほんまに嫌いだったら。自己犠牲ですから、あそこまでの怒り方は。自分の子どもを愛している、故に怒るというのと同じで。なので、そういうのが読み取れない若い人が多いのかなと最近、思いますね。

〈横山〉克己心とかフェアプレイ、ノーサイドを大人たちはある程度理解できる。テーマにあるように、それをバトンタッチするということは、我々の年金の問題もありますから若い人たちに頑張ってもらわないといかん。その時に結構、我々が大事にしてきたことが伝わればよいですね。安心、安全、そういう時にホッとしますよね、お金の世界だけよりも。折角スポーツで、今おっしゃるような雰囲気になっていることは私も感じますし、奥野さんも感じておられる。お二人もそうだと思います。バトンタッチをどうしたらいいかということですが。

〈大八木〉奥野さんが言われた通りで、中央高校の子どもたちを見ていると、何かにドロップアウト、スピンアウトした子どもたち、ラグビーで入ってきた子どもたちじゃないんですね。すぐわかるんです、言われたことが。「来るな」いうたらきよらへん。彼らに言うんです。「休んでもええ。休む前に必ず電話せえよ。俺か監督に」。絶対しません。自分との葛藤やったんです。３月６日から練習始めて10日くらいでわかったんです。練習試合をやらせて下手ですわ。ラグビーやって数カ月です。ミスするんです。「お前、何ミスしてるんや」。すぐに答えがでてきます。「いや、前の奴のパスが低かったから。きつかったんです、ボールが」。それはわかるけど。考え方をちょっと変えたんです。「ひょっとして帰れいうて、帰りよった子どもは、逆に僕のことを感じて、僕のことを気をつけてくれてるのと違うかな」。カッカッしてラグビーを教える指導以外の人格形成とか、そのへんの部分に入ってきたものに「悪いな」と思ってんのとちがうのかな。朝起きて「練習遅れるな」と思った時、「練習して笛ふいている時に携帯電話鳴らしたらきっとまずいと思ってるのと違うかな」、と。彼らは彼らなりに相手とのバランスのとり方は、高校生になると、コミュニケーションのとり方を自分なりの価値観を持って判断してるなということも感じたわけです。もちろん社会人になって無断欠勤したら罰なんですけど。ひょっとしたら社会も進歩していって企業に出勤せんでもパソコンの前で済むような時代になれば、そんなことをありかな、と。だから逆にコミュニケーションのとり方が必要で、スポーツがいろんな意味を持ってくるのではないかなと感じるわけです。

〈横山〉今の話でホウレンソウ、報告、連絡、相談しないさいということができていなければ、フェアプレイとかそれ以前の問題のような気もしますが。キーワードになるような理想的な状態に行く前に、大谷先生が言われたように犯罪が多くなったという社会の変容があると思います。そういうこととどう関連づけたらいいですか。仕組みですね、伝えるようにする。社会が変わってきたので、フェアプレイとか若い世代にとっては死語になっているかもしれない。それは我々の立場としては大事だということで、だからシンポジウムを開催しているわけですが。それを伝えるのは行政の仕事でもあると思いますが、どういう仕組みをつくっていけばいいと思われますか。真山先生から。

〈真山〉難しい質問ですね、今日は３人とも名前に歴史の史が入っているなとか、くだらないことを考えたんで。今の横山先生のご質問を考えますと、行政がそういうことを考えないといけない、何かやらないといけないとは思いますが、正直いって今の行政にはそれだけの力はないと思います。努力はしているんですが、目に見える効果は出ていないのかなというのが正直なところだと思います。大八木さんの取り組ん

でおられる高知中央高校の取り組み、行政、とりわけ教育委員会とか公立の学校で同じことをやろうとしたら、すぐはできないでしょうね。公立でないところも一つですし、ルール、制度とか、ある種、ちょっと離れたところでいろんな試みをやってみること。それを実際にやる人がいる。キーパーソンになる人がいるという条件が揃わないと、今の行政の力では解決できないのが教育、地域の問題なのかなと思います。キーパーソンに大八木さんが高知でなっておられるのだと思いますし、キーパーソンは努力をする、頑張り屋さんである必要はありますが、ある程度、知名度がある、この道を究めたということで人から尊敬を受ける人であると、より皆が集まってきて動きが活発になると思うので、行政はそういうのをサポートすることはできると思いますが、行政が主体的にやることは難しいのかなと思います。

〈横山〉大八木さんに言わせると行政を動かすのは簡単だということだったんですが、そうは簡単にはいかないという真山先生のお話でした。

３人の皆さんのようなトップアスリートが今日のようなキーワードを自ら広げていっていただかないと、なかなか定着しないのではないかということだと思います。片岡さんから、フェアプレイの精神、ご自分が培ってこられた何々させていただくという精神を今後どのように展開されるか、抱負みたいなものをお話いただければと思います。

〈片岡〉今まで野球ばかりやってきたといっても言い過ぎではないんですが、最近、引退してから子どもたちの野球教室に行くことが多かったり、今までは実際、子どもを見ていても野球をやっている子どもたちに面と向かうことはなかったんですが、そういう機会が多くなりまして。たとえばゲッツーを潰すというのもそのランナーが残ったことによって、次のバッターが「あいつがここまでやってくれたら俺、絶対返してやる」、と。送りバントにしても「自分を殺してアウトになってくれたんやから、必ず俺はこいつの期待に応えてあげるんだ」ということは野球というスポーツのいいところだと思うんです。野球界でものすごくいい技術、いい記録を残した人たちがいっぱいいると思うんですよ。それを人に伝えることは難しい。引退して皆さんの前で話してもなかなかうまく伝えられないんですが、野球界はそういう歴史があって、古いところもあるんですけど、辞めて、いろんなところで話をさせてもらうとそういうことを伝えていきたいな、と。将来的には現場でユニフォーム着てということが前提になると思うんですが、そういう時のために今、この期間にたくさん引き出しにしっかりいろんなことを詰めて、また新しいコーチ像、監督像になれるよう、井村先生も怖いですけど、僕、30歳超えてから星野監督のもとでやりましたからね。いろんな怖いところの下でやると新しいものも発見できますので、そういう新しい像になれるように頑張りたいと思います。

〈横山〉奥野さんには具体的にどのような方法で克己心を伝えていけるかということで。

〈奥野〉安心・安全というキーワードも出てきていますが、私自身が選手の時と現状が変わってきていて、今、夫は現役の陸上選手で、私は二児の母です。自分自身のことではなく、自分の子どもをどこに預けるかということが人生の最大のポイントになってきているんですね。どこが安心で安全なのかと思った時、それが難しいんですね。自分でつくるしかないと、どこかで思っているんです。自分でつくってそれが安心・安全になるかという保証はないんですけど、スポーツの中で感じたこと、体験したこと、監督さんを見て思ったこと、スポーツコメンテーターとして違う他のスポーツの方々とお会いして、そこで感じたことを総合してこれから自分で論文を書くのも大事なことですし、それにあわせて現実にどういう形にするか、どういう形で回していくかということが大事なので。子どもが下が１歳なんです。ほって家は出られないんです。夫も家にしばらくいろという空気をかもし出しているんですよ。なかなか出られないんですけど、落ちついてきたら自分でそれなりに動きをしていきたいなと、今、構想を練っております。経験してきたことを子どもたちに。今の子どもたちって、私たちの頃とは状況が変わってきて、インターネットもあればケータイもあれば、犯罪も起こっているし、自分の身を守ることも大変な時代ですが、その中でどうやってスポーツが機能していけるか。これからのテーマです。大八木さんにいろいろ教えていただきたいなと思っています。

〈横山〉振っていただいてありがとうございます。大八木さん。まとめてください。
〈大八木〉スポーツを真剣にやっていまして、対極にプロとアマチュア、ビジネスでスポーツをやるとか、教育とか、いろんなことがありますが、スポーツに一旦、ふれたり、足をつっこんだところで、バカヤロウがスポーツをやっているんじゃないと、もう一回認識していただきたいと思います。スポーツをやっているバカなんです。アホ、バカがスポーツをやったわけではない。入り口はそうかもしれませんが、スポーツのシステム、制度とかそこで成長する環境の中で伸びていくわけで、そういうふうに見られているところが、まだ日本のスポーツの価値観というのが低いわけです。

2001年から文化庁が文化芸術推進振興法をつくりました。文化に対する文化庁の予算は1,000億円くらい。スポーツ振興策の方は全部合わせても180億くらい、年間に。スポーツ省くらいできて、文化的、メセナ的に国家予算の１％、8,000億円くらいはそんなことに日本の国民も税金を使うことの余裕が持てるように、我々スポーツをやってきた人間が発言なり、そういうところを大事にしていきたいと思いますので、どうか、どうか、来年度もキーノートレクチャーに座らせていただくよう、心から祈念いたしましてまとめにさせていただきます。
〈横山〉いや、アデカデミックでした。こ質問がありましたら。
〈質問〉同志社OBで名古屋大同工業大学の情報学部でメディアを研究しております。片岡さんはメディア元年ですね。奥野さんはメディアに入られて引退する時のレポートを拝見しました。大八木さんはメディアの寵児ですが。伝えるということについて３人ともメディアとの関係が深いということで、今のメディアの問題点、メディアにもの申す、一言、実際にやられている中で、俺はこんなことを言いたいのにだめだとか、メディアに対する文句を。
〈横山〉メディア批判ということで一言ずつ。ただ朝日新聞共催なのでちょっと控えめに。
〈片岡〉阪神戦が多いんですが、皆さんが聴きたいところは僕たちが言いにくいところなんですよ、選手のことであっても。僕も一緒にやった選手のことは悪くは言えないところがありますよね。そういうところを皆さんは聴きたいと思いますけど。関西圏では視聴率がとれますよね。今は巨人、阪神でも３試合あったら１試合は全国放送されない時代です。優勝争いしている巨人、中日でも東京では10％いかない時代です。それが阪神戦になると20％を超えるわけです。視聴率がとれる間にあぐらをかかないで、勉強させてもらって、去年まで現場にいただけに、現場の声を皆さんにわかっていただくところが僕が関西テレビに出ている一つの理由だと思うので、そのようにしていきたいと思います。
〈奥野〉スポーツをテレビを通して見る人がほとんどだと思います。その中でテレビが情報を操作しているということを感じるんです。たとえば会場に行けばゴルフでも多くのプレイヤーを見ます。テレビで見ると石川遼君しか見ない、ほぼ。藍ちゃんばかり移す。ヒーロー、ヒロイン主義。誰かをつくったらそればかりを追っ掛ける。その選手を通してプレーのすばらしさは見られますが、それ以外の部分があまりにも差が激しすぎる。視聴率がとれる人しか写さない。視聴率依存、そこがすべてみたいになっているところが、別にこの日本スポーツメディアの問題だけではなく世界的にそうですし、それはどうしようもないといえばどうしようもないですし。今はネットもあるので、他のものを見たい人はそっちに流れていくという状態もできているので、見る人が選ぶ時代になっているとは思いますが、スポーツ新聞にしても、一般紙はそこまでひどくないですが、偏りがあるじゃないですか。その偏りはどうしようもないのかな、と。番組に出ていても、こっちを伝えたいのに、こっちの方が視聴率がとれるからと、私はこれをやりたいと通しても「時間がなくなりました、カット」と言われて伝えたくないものを伝えないといけないこともあったりしますので。スポーツニュースは時間との闘いなので、こう言いたいと思っていても、伝えきれない状況、「はい10秒、５、４、３秒」と言われると言いたいのに言えないということかあります。じっくり語れる番組をつくってもらえたらいいのなにな、と思っています。
〈横山〉お二人からは映像メディアの話だったので、大八木さんには折角ですから活字メディアについて触れていただいたら。
〈大八木〉メディアのスターシステム、スターをつくることによってハンカチ王子、はにかみ

王子、大八木篤史はこっちに置いておいて、バーッと盛り上がって賞味期限がすぎたら次に新しいものという、それに乗っかってしまうわけです。関西の番組で関テレが男のしゃべりをやっています、サブロウ、ボタンとか。３回くらい出ましたが、一切、吉本興行の方針です。ふられへんし、しゃべる間ないし、出る間もない、黙っていたら。芸人がすごいのは、楽屋裏で話をします、「ラグビーってどうなん？」。そのまま自分のこととして、自分が考えたこととしてしゃべられます。もうしゃべられたわ、もうないわ。生放送やから瞬時にやっていかないといかん。お笑いの世界では明らかに競争の中でスターシステムになっています。サンマやタケシさんや、行列のできる紳助さんまで行けば別や。でも紳助さんも予定表なかったらビビりまくっています。ずっーとそれを追いかけられながらやっていかないといかんところがございます。それはええとか悪いとかは別なんで。子どもに言うんです、亀田のボクシングの世界でも、台本あるんやで。切腹もきいてたんちゃう、チャンピオンは。チャンピオンは聞いてなくても、ジムの奴らは言われてんで。ファイトマネー、10分の１やろ、チャンピオン勝っても。一家で金儲けしてるんや、それはええやんけ。ええ家をかって車に乗ってる。ホンネとタテマエがある。

活字に論点を変えないといけないのですが、僕がしゃべっても関西弁に変えられるんですね。共通語でしゃべっているつもりなんやけど。関西の記者だったら許せるんですが、関東の記者が関西弁に書き直しよるんです。それが関西人が読むとアホみたいです。真剣にアホやという話です。しかしながら新聞はメディアの中で重要な役割を持っています。朝刊を配る方は雨の日も雪の日も必ず入れていただける日本のシステム、テレビは一方的に流されるわけです。新聞は次の時に読んだら「大八木がこんなこと言うてる」、と。本と同じです。次の瞬間に違う角度から、その人が言うことを見た時にパッと見えるという重要な活字媒体というか、力を持っている。IT情報化時代ですが、新聞配達制度の仕組みだけは将来も残していただきたいというのがちょっぴり褒めで終わりたいと思います。

〈横山〉うまくまとめていただき、ありがとうございました。今日のこのようなテーマをメディアがちゃんと伝えていただければさらに中身が浸透するかと思います。真山先生、一言だけまとめていただいて。

〈真山〉スポーツの教育力ということですが、大八木さんは大学院博士課程に在籍中です。奥野さんは修士課程を修了されております。奥野さんの旦那さんも修士課程にいらっしゃいます。スポーツの教育力を高めるためにアスリートたちがまさに教育、研究をしているという努力をされております。あとは片岡さんだけかなと思っておりますが。

〈横山〉片岡さん、来年の受験に向けて秋から勉強しましょう。スポーツの教育力は地域再生のハブになるという結論で、今日のシンポジウムを終わりたいと思います。どうもありがとうございました。